

武吉次朗先生の「新語が映す中国」③

「和諧号」 中国経済新聞 071115 掲載

いま中国のメディアに頻繁に登場している言葉は「和諧社会（調和のとれた社会）」で、今では「現代化」と並ぶ中国人民の合言葉になっている。

ところで、今春から「和諧号」と呼ばれる高速列車が中国各地を走っている。

中国の鉄道は、1997年から全面的スピードアップを5回実施してきたが、今春の第6回目で、機関車牽引でない新幹線タイプ（中国語で「動車組」）がお目見えした。いずれも技術導入による国産化とされており、CRH1はカナダのボンバルディア社、CRH2は日本の川崎重工業、CRH3はドイツのシーメンス社、CRH5はフランスのアルストム社から導入され、四方（青島）、唐山、長春の工場でそれぞれ製造されている。ちなみにCRHとはChina Railway high-speedを略したもので、列車番号は頭にD（「動車組」のイニシャル）が付いている。そして、すべてのCRHの通称が「和諧号」で、車体の両端に大きく書かれている。

筆者は先日、「大陸と台湾に進出した新幹線技術視察団」（野沢太三団長）に参加する機会を得て、大陸では青島から済南までの387kmを、D608列車で走った。

東北新幹線「はやて」タイプの8両編成で、走り出すと時速が刻々表示され、最高は291km。でも揺れをほとんど感じることなく、なかなか快適。誰かがタバコを立ててみたところ、時速190kmで倒れた。途中2駅に各1分停車し、定刻に到着した済南駅では、ちょうど北京から、やはりCRHのD35列車が着いたところだったが、これは8両編成を2列車つないで16両になっていた。

いまCRHが運行している区間は、北京から天津／ハルビン／上海／青島／武漢、上海から南京／杭州／青島／鄭州／南昌、広州から深セン（土へんに川）などで、毎日10往復だが、今年末には217往復になるという。

現在、CRHはすべて在来線を、各駅停車と貨物列車の合間を縫って走っているのだが、客車と貨車の線路を分離することで効率アップを図るべく、客車専用線の敷設工事が全国で進められており、3年後には延べ7000kmに達する。道床に砂利を使わないスラブ方式という新技術が採用されるので、揺れも騒音もさらに小さくなる由である。

かねて話題になっていた北京～上海間の高速鉄道も、いよいよ着工間近と報道されており、数年後には実現する。新華社電によると、日本から導入したCRH2はCRH全体の71%を占めている。また、日本の新幹線は台風や地震への対策も充実しているので、CRH2を改良した新型車両が採用される可能性は高いと思われる。

「和諧号」。それは「和諧社会」を目指しひた走る中国を象徴するかのようだ。